
accidental overlapping **～偶然の重なり～**

あーずにゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

accidental overlapping ～偶然の重なり～

【Nコード】

N0804Y

【作者名】

あーずにゃん

【あらすじ】

俺は、偶然、というか殆ど奇跡で超難関高校に入学し、偶然校門前で出会った奴を助け、そいつが偶然同じクラスで隣の席。あげくの果てには、携帯の機種まで同じだった。

そんな偶然が重なり、いろいろな人や物、運命までも巻き込みながら、偶然にも今、俺と藤和は、同じ場所に立って生きている。

完全オリジナルです！

見ていただけるとうれしいです。

オリジナルを書くのは始めてなので、感想、アドバイスなどお願いします m (_ _) m

第一話 『奇跡と出会い』

入試で奇跡が起これると思うか？

普通は絶対に起きない、ってか、起きたらヤバいを通り越して笑えるよな。

でも、起こってしまったのだ。

三年前、東京、愛知、大阪の三県で、試験的に導入した入試の方法があった。

『マークシート受験法』ってヤツだ。

それを採用した理由は、出来るだけ多くの問題を短時間で出し、それをどれだけできるかっていう内容だ。

なぜそんなことになったかというところ、同じく三年前に創立された、

『国際選抜職業実践型高等学校』通称国選高、だ。

その学校は、全世界の中でも初めての試みで、実に先進的なものであった。

普通の高校は、仕事に就くために勉強する。

が、この学校は実際に仕事を実践し、その職についてのプロより上の存在になること（野球で言えば、メジャーリーガーだ）これを目指している。

三年前、できた当初は『国際職業実践型高等学校』という名称で、倍率は40倍をオーバーした。

そのせいで、採点の時間がかかり、他の高校への受験者の激減が起こった。

そのために打ち出したことが、『受験者を点数の高い順からドラフトすること』だった。

ちなみに定員は80名だ。

話を戻そう、それで、俺に奇跡が起きたってのは、この超エリート高校に選ばれたことだ。

ちなみに、俺はある一教科以外は全て平均点から - 20 だ。

そんな俺が受かった訳は、マークシート受験法なるヤツのせい。

4 択の問題を、わからずに適当に書いたら、正答率が 95 % を超えた。

俺の勘も捨てたもんじゃないらしい。

まあ、いいことなんだろうが、俺は少し迷惑している。

ニユースが始まれば、堂々と合格した 80 名の名前が出る。（人権侵害とかいうやつにあたらないのか？）

学校へ行けば、校門にでっかい横断幕がある。

クラスに入れば、女子からの質問攻め + 男子の冷たい目。

なんかどこぞのスター様の気分だ。

決してちやほやされるのが嫌なわけではない。

目立つのが嫌なんだ。

俺は普通の人生を普通に生きて行きたかったのに…。

かと言って、この卒業したらエリート確定の高校に受かり、それを破棄することは世間的に無理だ。

だから、俺はこの高校に進学した。

申し遅れた、俺の名前は立川昂
たちかわすばる

。

国語の成績以外全て悪く、顔は中の上、スポーツもまあまあできる。
身長も 178 cm とまあまあ高い。

まあ、こんなところだ。

特に特徴などない、ちょっと背の高い普通の一男子高校生と想ってくれればいい。

ただ、特徴があるとすれば…女子が苦手ってことかな。ていうか、元々人と話すのが苦手だ。

だから、目立たないで、いつかは気の合う人とであって、子供作って、ひっそりと暮らしていきたくった。

…だが、それも無理そうだ。

今、俺の目の前には、無数の記者たちがシマウマに群がるハイエナよろしく、150cmの小柄なポニーテール娘に群がる。

マイクやICレコーダーを様々な場所から押し付けられて、苦しうにしているそいつを、なにを思ったのか俺は、人間が苦手な上に、そいつが女子だったのに、助けようとしたのだ。

「よう、お前もこの学校だったのか、行こうぜ。」

記者の間を割って入り、ポニテ娘の手を引いた。

最初はわけが分からないような顔をしていたが、俺の意図を理解したらしく、話を合わせ、記者の群れから抜け出した。

「別に…助けてくれなくても良かったのに。」

「迷惑だったか？」

「そういうわけじゃないけど…。」

こいつ、体は小さいくせに、余計な意地をはるらしい。

「なら、いいだろ。」

やっぱ人と話すってのは疲れるな。

特に異性なら二倍疲れる。

ポニテ娘が、何か思いついたように顔を上げた。

「あんたって、どっかの社長の子供だったりするの？」

「そんなわけない。どこにでもある家庭の長男だよ。」

「ってことは、あんたって立川・・・昂？」

「な、なんで知ってるんだ？」

この学校に入学するってことと、さっき社長の子供とか聞いてきたから、国家機密のデータベースにでも入り込むことができる家柄な

のか？

「なんでって、ツイッターとかフェイスブックよ。あんたとあたし結構騒がれてるわよ。」

「な、なぜだ？」

「一般家庭から受かったからよ。この学校の生徒なんか、授業料のたっかい塾とか、家庭教師とかに毎週40時間くらい勉強教えられてる、金のある社長とかそこら辺の子供ばっかよ。」

「そうなんか・・・。ってことは、あんたも一般家庭なのか？」

「そうよ。父親が中小企業の課長やってる、ありきたりな家よ。ていうか、あんたってよばれるとム力つくわね。」

お前も俺のことあんたって呼んだじゃねえか。

「じゃあ、なんて呼べばいいんだ？」

「藤和亜美

とうわあみ

。」

「藤和な。分かった。」

「それでいいわ。早くいかないと遅刻するわよ。」
携帯のディスプレイを俺に見せる。

「そうだな。」

そういつて横を向いたときには、藤和はもういない。

「早くこないとおいてくわよー！」

ったく、入学早々変な奴に会っちゃったもんだ。

どうせめがねをかけたやつばっかなんだろ、と思ったが、そういう奴は5割くらいで、机に突っ伏してる奴が2割、鏡をみてせっせと髪をなおしてる奴が2割、残りの1割は普通に話しているだけだった。

（俺の席はどこかな、っと。）

俺の席はなんと窓際の一番後ろ、なにをするにしても最高のポジションだ。

ほんわかした気持ちでスクールバックを机におく。

「あら、あんた隣なの？」

「え、ああ。そうみたいだ。」

「ふーん。隣で変なことしないでよ。」

さつき会ったばかりなのに俺のなにが分かる。

「あ、そういえば、メアドと番号教えてよ。あたしこういう奴ら苦手なんだ。」

前のめがねをかけた真面目ちゃんたちをみて、うえー、と舌を出してみせる。

「分かった。はい。」

僕は携帯を出して、藤和の方へ向ける。

「なに、くれるの？」

「赤外線だよ！」

ああ、そう。と言って、藤和も携帯を差し出す。

「ああ。」

二人の声がそろう。

同じ機種だったのだ。

偶然にも。

「ま、まあ、これ結構人気モデルだし、かぶることもあるわよね。」

「あ、ああ。それより早くしないと先生くるぞ。」

ピロリン と赤外線を終えた合図が聞こえた。

顔を上げると、長いまつげに少々切れ目の気の強そうな目。

整った鼻に桜の花びらのように鮮やかなうすいピンクの唇。

さつきは気づかなかったが、こいつは相当美少女だ。

「・・・なにみてんのよ。」

「い、いや、何でもない。」

声をかけられハッと我に返る。

「そんなぼーっとしていると、教師に目つけられて宿題増えるわよ。」

「あ、ああ。」

きつい言葉をかけながらも、少し心配してくれるのはこいつの優しさだろうか。

少しすると、教師が入ってきた。

どこにでもいそうな奴だったが、言うことがなんか難しい。国語力があつてよかったぜ・・・。

「ちよつといいですか？」

「え、あ、はあ。」

「私、吾妻誠一

あがつませいいち

と申します。」

「吾妻くんね。よろしく。」

吾妻つて、たしか日本で普及率NO.1のウイルス対策ソフトの会社の代表取締役の名字じゃなかったか？

「それで、あなたは立川昴さんですよな？」

「ああ、そうだよ。ていうか、敬語じゃなくていいよ。堅苦しいし。」

「はあ、そうですか。」

「うん。それで俺になんか用かな？」

「あ、すっかり忘れてた。こっちから話しかけたのにごめんね。」

この学校は天然が多いのだろうか？

藤和も天然ばかったし。

「それで、あの、よかったら、僕と友達になってほしいんだけど・・・。」

「あ、いいよ。とりあえずメアド交換しようか。」

俺がそういうと、吾妻はほっとしたような顔をした。

「吾妻つて聞いただけで分かったでしょ？」

「ああ、あのウイルス対策ソフトの。」

「うん。この学校に来る前は、なるべく普通の生活がしたくて、公立高校に通ってたんだ。でも、お父さんが有名だから、みんなに一目おかれて、まわりに誰もいなかったから・・・。」

「そうなんだ。大変だったね・・・。」

「どうやら、金持ちも金持ちで大変らしい。」

「あ、それじゃ、また後で！」

「あ、おう。」

あいつとは話しても疲れなかったな。

気が合う奴なのかもしれない。

そして、一限の授業が始まったとき、俺はそのカリキュラムに絶句した。

第一話 『奇跡と出会い』（後書き）

感想いただけるとうれしいです。

第二話 『衝撃の寮生活』

「な、なんだよ、これ…」

このカリキュラムはどうやら極端に普通の高校で行う授業が少ない。

殆ど『実践』と書いてある。

みんなあんぐりと口を開ける中、教壇の教師が口を開いた。

「入学前にはお知らせしませんでした。この高校では、定期テストは行いません。」

…は？

多分この瞬間、名前も知らないクラスのみんなの心が、一つになったことだろう。

「その代わり、年に4回行う実践型のテストをします。」

その言葉と同時に配られたのは、普通の高校にありそうな学科が書かれた紙だった。

「皆さんには、この中からどれでもいいので、一つ選んでもらい、それに関したテストをします。」

隣の席から椅子が動く音がした。

「あ、あの！という形式で行うのでしょうか。」

俺の隣のやつとは、気が強くて多分このクラスで一番かわいい、長めのポニーテールの女子だ。

「藤和さん…でしたね。それは、実際の企業に行き、その従業員の方と同じことをしてもらいます。そこで、我々教師がどれほどできているか、判断し、できていなかったと判断した場合は、補修となります。ちなみに、3回失敗したら、退学です。」

おいおい、そんな怖いことをサラッと言うなよ。

「でも、心配する必要はありません。この学校には専門の資格を持った教師がいます。ちなみに私は調理専門です。」

そういうと教師はポケットから、調理師一級の免許をとりだした。

そのほかにも、製菓系など、いろいろとあった。

「それと、入学式はありません。その代わり、寮の準備をしてください。」

入学式もないってサラッと言いやがった。

この高校は何かおかしい、と思うのは俺だけだろうか？

「寮は、世田谷にあります。」

えーと、ここが渋谷だから…そんな遠くないな。

「通うときは、支給される車を使ってください。」

…は？

免許は？

と思ったが、みんなさほど驚いていない。

「おい、藤和。免許はどうなるんだ？」

「本当にあんた何も知らないのね。この学校、最初の二ヶ月は普通自動車、大型バイク、クルーザーの免許取らされるのよ。」

「く、クルーザーまで…。」

「どんな仕事でもできるようにだつてさ。でも、クルーザーは殆ど使わないって。あと、2年になったら小型飛行機の免許もともらしいよ。」

やっぱりこの学校はおかしい。

「それと、寮は男女混合、三人で暮らしてもらいます。」

おい、何ていった？

年頃の男女を、同じ部屋に置くつもりか？

さすがにこれには、クラス全体にざわめきが起こった。

「それでは、説明は以上です。寮の部屋割りは決まっていますので、今から配る部屋に行ってください。」

そいつって教師は1人ずつ、紙を配り始めた。

俺は812号室らしい。

そして、下にある8ケタの番号は、オートロックだろう。

「あ、言い忘れましたが、明日は学校がありません。家具などをルームメイトと買いに行ってください。それでは、さようなら。」

……
クラスにしばしの沈黙が現れる。

沈黙を破ったのは、吾妻が席を立つ音。

「た、立川くん、行こう？」

「あ、ああ、そうだな。」

「あたしも行くわよ。いいわよね。」

寮に向かう電車の中は、すごく気まずい。

幸い中途半端な時間なので、座席はかなり空いていた。

「あ、あのさ。あたし、藤和亜美。あ、あなたは？」

こいつ、俺のときはあんたって言ったのに…。

話かけられた瞬間、針で突かれたように跳ね上がる。

「あ、ぼ、僕は、吾妻誠一。よ、よろしくね？」

「う、うん、よろしく。」

始めて付き合った中学年のカップルのように、ぎこちない。

横目で笑っていると、後ろから蹴りが飛んでくる。

「吾妻君は、あんたと違って品があるから緊張したのよ！」

そういつて藤和は少し着崩したブレザーと、アイロンとワックスで整えた髪を順々に指差す。

「これでもゆるいほうだぞ？目黒の学校前行ってみるよ。」

「ば、ばかにしないでよね！そんなん知ってるし。」

どうやら知らなかったらしい。こいつの中学は相当平和だったのか？

「でも、お前だって…」

藤和の胸元のネクタイを見下ろす。

「え？！べ、別に黒でもいいじゃない…」

飛び上がるように座席から立つ。

黒って、なんだ？

「なに勘違いしてるかしらんが、俺はそのゆるんだネクタイのことを言っただが。」

俺がそういうと、藤和はかぁーと顔を赤くし、ゆるんだネクタイを直し、これでいいでしょ、と言う顔をする。

「てか、黒ってお前、ブラ…うつ！」

ブ、と言い始めたときから、藤和の右腕は俺の腹をロックオン。いい終わる前に俺の腹をえぐった。

「そうゆうのは、分かっても言わないもんなの！ほんとデリカシイないわね。だからもてないのよ。」

会ってから半日でもてないって分かるのか。

大した直感力だな。

ていうか、正直いうと、もてたくはないからな。

女子は苦手だ。

「うるせえな。」

「女子だからって甘く見てると、痛い目にあうわよ？」

藤和は右腕を振り回す。

また殴られたらたまったもんじゃない。

「悪い悪い。冗談だ。許してくれ。」

「わかればいいのよ。わかればね。」

そういつて椅子に座って勝ち誇ったような顔で、俺を横目で睨む。

「ねえ。」

「ん、どうした？」

吾妻が俺の肩をたたいた。

「藤和さんとは、前から知り合い？」

「いいや、今日あつたばっか。」

「へえー！すごいね…。あんなに仲良くしてるから、知り合いかと思っただよ。」

勝手に馴れ馴れしくされてるだけなんだが。

「僕は…女の人と話すの苦手です。」

「ああ、俺もそうだぞ。女子は苦手だ。」

「え！じゃあなんで藤和さんとあんなに仲良くできるの？」

「それは、あいつが…」

あいつが、なんだ？

特に理由もないのに助けて、流れてメアド交換して、今は一緒に寮に行く電車乗って。

自然に友達みたいになってたな。

吾妻が俺のことを不思議そうな目で見ている。

「まあ、今度話すよ。」

「えー、今教えてよ！」

「あんたたちうるっさい！ 電車の中くらい静かにしなさい！」

「はい……」

まあ、結果的に一番うるさかったのは藤和の声なんだが……。

電車を降り、 駅から徒歩5分。

世田谷の住宅街でもかなり目立つ、15〜20階だてだつてのにデザインーズマンションっぽい。

中にはいると、2cmはあるだろう、厚い防犯ガラス。オートロックの8ケタのキーを正確に打ち込み、エントランスに入る。ブラウンで統一された自販機が6台くらい置いてある40m×50mくらいの、広い空間。

「これは…もう寮っていうレベルじゃないよな？」

隣で豆鉄砲を食らった鳩のような顔をしている藤和を見下ろす。

「そう、ね。これで寮費込みで月10万なんだから、大したもんね。」

「まあ、一応国家プロジェクトだしね。」

吾妻はさほど驚いてはいないようだ。

「そ、そうだな。とりあえず部屋行こうか。」

エントランスの向かって右側にあるエレベーターに乗り込む。

「あ、僕4階だから、降りるよ。じゃあね！」

「おう。」

エレベーターは無音で上がって行く。

「なあ、お前何階？」

「お前って言わないで。」

めんどくさいやつだ。

「…藤和は何階だ？」

「8階よ。ていうか、8階のボタン押してるんだから気づくでしょ。」

「…ああ。それもそうだな。」

でも、こいつは8階のボタンなど押していない。

押したのは俺だ。

それに気づいたらしい藤和は…

「あんたも、8階ね。」

「ああ。」

まさか、とは思うが、こいつと部屋が一緒じゃなかるうな？

二人で、8階に降り、ホテルのようなきれいな廊下を歩く。

801、802と、どんどんと部屋を通りすぎていく。

そして藤和は、810の前で止まり、俺のほうへ振り向いた。

「まさか…」

「お前…」

「「同じ部屋?!」」

おいおい、まじかよ。

一応確認しよう。

「俺は、812だ」

「あ、あたしもよ」

偶然にもほどがある…。

第二話 『衝撃の寮生活』（後書き）

次回は一週間以内に更新したいと思います。

第三話 『女』理解不能』

ここまでくると、誰かの陰謀じゃないかとも思ってしまった。

「ん、まあ、とりあえず入ってみるか」

「そ、そうね」

お互いに油の切れた歯車みたいに、会話から歩行までぎこちない。

「それじゃ、開けるぞ」

「うん…」

カチャ、とドアがあく。

「うわあ、すごい？」

声をあげたのは藤和だ。

この部屋、なんと言っても広い。

リビングは12畳以上ある。

それに加えて、8畳の小部屋が4つ。

キッチンはステンレスのシステムキッチンだ。

ただ、残念なのは家具がないこと。

冷蔵庫、電子レンジ、テレビ、パソコンなどはあるのだが…

タンスやテーブル、そういったものがない。

リビングは洋風だが、個室は洋風が2部屋、和風が2部屋だ。

俺は畳が好きだから…和風にしようか、などと考えていると、ガチャ、とドアの開く音がした。

顔だけそちらにむけると、165くらいの身長に、明るめの茶髪（ライトブラウンって言うのか？）を

背中の3ノ1くらいまでのばしている。

顔は大人っぽく、前髪は目にしっかりとかかっている。

「えーっと、君が同部屋の人かな…？」

「う、うん。よろしくね…」

…なんだこいつ。

は？ ずかしがってんのか？

顔が真っ赤だ。

「おう、よろしくな」

キッチンをチェックしながら顔だけ向けて言う。

「お、お邪魔するね」

これから自分の部屋になるってのに、他人の家に入るみたいだ。

「ねー、お腹すいた…」

トイレに入っていた藤和が出てきて、俺以外のルームメイトと鉢合
わせる。

「あなたが、葉山みい《はやま》さんね？」

なんで知ってたんだ？

さっきTwitterみたが、こんな情報どこにも無かったぞ。

疑問に思っている俺の気持ちを察したらしく、「玄関のプレートに
書いてあったわよ」と。

見に行くと、上から順に、俺、藤和、葉山の順に書いてあった。

そして、俺のところには“室長”と…って室長？！

「なんで俺が室長…」

「知らない。多分適任よ」

適任って、その根拠はなんだ。

自分がやりたくなかったただだろ、顔にやついてるぞ。

「なあ、室長って何をするんだ？」

「多分…何もしないわよ。ただ、この部屋で起きたことの全責任は
あんたにあるってことね」

得意気な顔で言う藤和を見て、それくらい知ってるよ、と言いたく
なる。

「…何も起こすなよ」

「……お腹すいたから、買い物ついでになにか食べにいきましょ！」
あつ！無視しやがった…

何か起こすつもりか？

何か聞き出そうとしたが、藤和はすでに、はわわ…と震える葉山の
手を取って玄関前にいる。

「ねえ、あんたもきてよ！」

「え、え、あ、うん」

「何慌ててんの？荷物持ちよ」

「少しでも期待した俺がバカだった。

あれ、でもなんで期待したんだ？

女は、苦手なはずなのに。

「いや、考えるのはよそう。

最近よくあることだし。

ということで半ば強引に連れ出された俺は、藤和に言われるがまま、ホームセンターへ向かった。

まあ、定番だな。

家具って言ったらここだろう。

だが、藤和がそこで買ったのは大きめの台車2台のみ。

「おい、テーブルとかは…」

「はあ？こんなところで買うわけじゃないじゃない。雑貨屋さんでかわいいやつ買うのよ」

部屋なんてほとんど見られないんだから、なんでもいいんじゃないのか？

これだから女って生物は分かん。

「で、なんで台車？」

「かわいい家具を運ぶためよ」

「配達でいいんじゃないか？」

「い・ま・す・ぐ置きたいの！」

そんな強調しなくても…

それから、台車2台を持たされたまま、電車に乗って渋谷へ。

そのとき、客からどれだけ変な目で見られたかは、言うまでもない。渋谷についてからは、少し歩くというので、台車を押したままなので、通行人からまるで裸で歩いているかのような羞恥プレイを受けた。

「うっしょ」

着いた先には少し小洒落た雑貨店。

男が一人で入れないピンクの店内に、台車2台を持って入ってたか？
入り口に立ち尽くす俺を、藤和は無理矢理中にいれる。

「いらつしゃい…ませ」

ほら、あの店員引いてるぞ。

横を見ると葉山が小さく笑っている。

俺の視線に気づいたのか、ふっと顔をそらす。

その瞬間、ふわっと前髪が目から外れる。

そこに見えたのは、大人っぽい口や鼻とは反対に、子供っぽく、かわいらしい目が見えた。

「わ、私の顔になにかついてますかっ？」

「い、いや、なんでも」

照れ隠しに天井までピンクなこの店を見回した…瞬間、藤和が何枚かのカードをもってきた。

「なんだそれ？」

「家具の番号よ」

ひらひらと7枚くらいのカードを見せる。

「早いな…葉山はどうするんだ？」

いまだに顔が赤い、葉山を見下ろす。「じゃ、じゃあ、私もいつてくるね」「おう」

…しばしの沈黙が続く。

その間藤和はずっと俺の顔を見ていて…

「なあ」

「ねえ」

嘘、はもっちゃまったよ。

無駄に気が合うな、こいつとは。

「おまえから言えよ」

「う、うん。じゃあそうする。あのさ、さっきみいちゃんと何話してたの？」

みいつて…ああ、葉山のことが。

「別に．．．てか、俺が何話そうがおまえには関係ないだろうが」
「うん、そう。あんたの言つとおりなんだけど、あたしだけ、仲間外れにされるみたいで．．．」

ああ、そうゆうことか。

葉山に嫉妬してるかと．．．っていうか、嫉妬する理由がないじゃんか。

何考えてんだ、俺。

がしがしと頭をかく。

「話してたっつーか、葉山に少し見とれてただけだよ」
ほかに言いようがなかったんだ、仕方ないだろ？

「へ、へえ。そっか、そうだよ。あんたも男だもん」

当たり前のことをつぶやき始めたので、顔を上げて葉山を待つことにする。

「おい」

「なに？」

「これもって、電車乗れって？」

「なに、歩いて帰るつもり？」

だめだ、こいつには何いっても無駄だ。

「はあゝ、疲れちゃった。外食する予定だったけど、家でゆっくり休みたいから材料買っていきましょ」

立ち尽くす俺はガン無視、俺のことを空気が煙みたいに思ってるんだろうか？

かといって放り出すわけにはいかないので、おとなしくついていく、情けない俺だった。

第三話 『女』理解不能 (後書き)

感想よろしくお願いしますm ((m

第四話 『二度目の買い物』

ということで、適当に買い物して帰ってきた。

ちなみに、俺の精神はズタボロ。

電車の中で、女子高生に「なにあれ?!」とか言われて写真とられて、数分後にTwitterのトレンドのところに『変態』って名前で俺の写真載ってたぞ。

今日の前にいる藤和に、「バーカバーカ、死んじゃえ!」なんて言ってみたい気もするが、倍返しに返ってくることに間違いなしだ。

…てか、子供っぽいな、俺。

にしても…一番心配なのはこの生活をやっていけるかどうかだ。爆弾（藤和と葉山）がいるこの火薬庫で、俺はその二つの爆弾に火をつけずに過ごせるのだろうか？

もちろん、自然に爆発することもあるんだろうが。

てなわけで、部屋に戻り、俺はリビングの家具の設置を始めた。

まあ、テーブルを組み立てるだけなんだが。

「藤和!」

「なに?」

「ソファーはどうすんだ。リビングにせめて一つはほしいぞ」

「それもそうね…午後から買いに行きましょう。どうせ暇でしょ」

「まあな」

「ついでに、あんたの家具もよ。あたしもついて行ってあげる」

「お、おお、そうか。ありがとな」

「…別に。今日付き合ってもらったし、そのお礼と思ってくれればいいわ」

「おう」

こいつも正直じゃないな。

素直に手伝うっていいばいのに。

もう作業が終わってしまった俺は、横になってお昼の定番番組を

見ていた。

「ははっ」

某芸人のバカな素振りに笑ってしまったのが運のつき。
げし、と背中をけられる。

「あんただけ休憩？大層なご身分ね」

「だ、だつてよ。やること終わったし」

「それじゃあ昼食でも作りなさいよ。それくらいできるでしょ」

俺はその言葉を聞いた瞬間、すくつと立ち上がり、藤和のほうを向いた。

「ふふ、それくらい朝飯前さ」

実は、料理はまあまあできる。

「は？何言つてんの。朝飯じゃなくて昼食を作れって言ったのよ」

「いや、そういうわけじゃなくて……」

「アホらし。さつさと作つてよね」

そういつて自室へと戻つていく。

なんだよ、ちょっとくらい俺のことを聞いてくれたっていいじゃないか。

自慢なんて、生まれてから数回しかないぞ。

まあ、こんな不満を言ってる俺だが、今思えば、小、中学生のころの俺にとつては、こんな生活は夢だったのかもしれないな。

あのころの俺は、学校が終わっても友達と遊ぶこともなく、まっすぐに帰っていた。

もちろん、部活になど入ってもいない。

理由は、度重なる父親の転勤と、小1のころに死んでしまった母親のせいであろう。

仲良くなった奴もいたが、それは稀だ。

転校してきた一週間の間はちやほやされたが、それ以降はいつも通りの生活に戻ったようだった。

こんなにも人は早く自分から離れていくのか、そう思った。
母親が死んだのは、ショックだった。

家に帰ってもずっと一人きり。

しばらくすると、むしろ一人のほうがいい、そう思ってしまった。中学に入ってから、モテた。

うらやましことだと思っだろう、だが違った。

告白されたのはうれしいことだった。

でも、クラスの男子から「なんであいつだけ…」という目で見られたらしく、ハブられた。

女子と仲良くすればよかった、のかもしれない。

だけど、そのころから女子は苦手だった。

話しかけられても、「ああ」とか「うん」とか会話とは呼べない会話しか続かなかったのだ。

結局、俺は3年間ひとりだった。

…いや、一人だけ、ともだちができたな。

その話は、またあとにしよう。

なぜなら、後ろで藤和がとがった犬歯を剥いているからだ。

「はいはい、いまやりますよ」

「えっ、気づいてたの？」

「隠れてるつもりだったのか。足音でわかったぞ」

どす、と腰にパンチが入る。

「なんで俺がなぐられるんだ…」

「あ、あたしが太ってて、足音が大きいって言いたいの?!」
「誰もそんなことは言ってない。」

「違っって…。ていうか、お前は十分痩せてると思うぞ」

「え、ええ、そう?」

「ああ、もちろん。嘘つくわけないだろう」

「あ、ありがとうね」

「なにも感謝されるようなことは言っていないぞ?」

あれ、なんかこいつ赤くなってる。

「よ、よくそんな恥ずかしいことポンポン言えるわね」

こいつはなにを勘違いしている?

よくわからんぞ…

「まあな。じゃあ昼飯つくるかな」

こういう時は適当にあしらっておくのが一番…だろう。
適当に…焼うどんでもいいだろ。

簡単だし、そんな手の込んだ料理はしたくない。

「わ、すごい…」

「うおっ！葉山か。どうした」

いつのまにか俺の横にいた葉山に驚く。

「私、料理作れないから、すごいなって思ってた」

「別に、まあこれくらいはな」

葉山がずっと隣で見てるので料理しづらかったが、一応できた。

「ほんとだ…あんたほんとに料理できるのね」

「まあな」

適当に昼食を食べ終え、俺と藤和は出かけることにした。

「葉山は来ないのか？」

「うん。まだ部屋の準備終わってないから…」

「そうか。じゃあ行くぞ、藤和」

「あ、うん」

というわけで外に出たのだが…

どうも、女と二人つきりってのは気まずいな。

話題が思いつかない。

「ねえ」

「ん、なんだ？」

「さっきからあたしたち見られてない？」

「誰に」

「通行人に」

「まあ、確かに…」

下にいる藤和を見下ろすと…

お、おい、こいつ、ブラが…透けてる。

「なによ、変な顔して」

「お、お前…」

「なによ、はつきりいいなさいよ」

「ブラが…」

「は？こんな時になにいつて」

「あああ、と沸騰したように藤和の顔が赤くなる。

「こんの、バカあ！！」

神様、なぜ俺が殴られなければいけないのですか…

この世の不公平さに少し絶望しながら、あたふたしている藤和へ羽織っていたパーカーを渡す。

「ちよつとでかいかもしれないけど、これ着とけ」

春らしい青色のそののサイズは、しなわけで…

「だぼだぼなんだけど…」

予想通りだ。

「仕方ないだろ…」

そのまま歩くか？と続けて少し冗談を言おうとしたのだが、言えなかった。

こいつ、かわいい。

なんなんだ、このかわいさは。

なんていうんだろ、妖精みたいな感じかな。

それも、初々しさを感じる。

強いイメージからいつきにふんわりとしたイメージに変わった。

ああ、くそ、うまく言い表せない。

でも、こいつは俺の脳ではいい表せない、それくらいかわいいのだ。

「そ、そんな変？」

「ああ、いや、大丈夫」

「じゃあ、なんでそんなに見てんのよ」

「別に…あ、電車来た」

究極のタイミングで来た電車の運転手に感謝し、乗り込む。

「なあ、俺は普通の店でいいからな」

「そう？ピンクで染めてあげようと思ったのに」

「余計なことはせんでいい」

あたしがやったほうが絶対いいのに…とすねる藤和にくぎ付け。

一応言っておくが、俺じゃないぞ、中年サラリーマンだ。

「ねえ、また見られてない？」

どうやら視線に敏感らしい藤和が気になって仕方ないようだ。

お前がかわいいからだよ、とは言えるわけがなく、とりあえず中年サラリーマン数人にはらみをきかせておいた。

すぐに顔をふせたサラリーマンが、「今どきの男の子は彼女を見ただけでにらんでくるのか」「ていうかあれ妹じゃないのか」などと言っている。

こら、そこ、二重に勘違いするな。

こいつは俺の彼女じゃないし、妹なんかじゃない。

こんな生意気な妹がいてたまるもんか。

渋谷についた電車に降り、ikeaイケアに行く。

値段も手ごろだし、俺はこんなくらいがちょうどいいんだ。

そこで俺は、白のシングルベット、ガラスローテーブル、間接照明の白のランプを買った。

部屋は白を基調にするつもりだ。

もとは和室の予定だったが、葉山にとられてしまったため、洋室にすることにした。

「お届けは一週間後になりますが一覧がよろしいでしょうか」

「あ、はい」

「ではここに住所とお名前と電話番号を…」

一通り手続きを終えた俺は藤和をつれ、駅前のビックカメラへと向かった。

「何買うの？テレビならあるわよ」

「パソコンだよ。モバイルノート」

「もばいるのーと？」

「んーとな、少し小さいノートパソコンのことだ」

「最初からそう言いなさいよ」

「あ、ああ。悪い」

なんで俺があやまらにやいかんだ、と言ってから思う。

で、買ったのは東芝製、intel^{インテル}の最新モデルの入ったやつ。

それと、最大100mbpの無線ランルーター。

これがあれば無線で楽だからな。

有線ランポートを引いてくるなんてめんどくさいことはしなくて
もいい。

「これで終わり？」

「うん、そのつもり」

「ねえ」

ぐい、と俺のtシャツの袖を引つ張る。

「なんだよ、そんな急いだって物は逃げねえぞ」

「これ、ほしい！」

藤和が指差したのは、空気清浄器。

「空気きれいになるんだよ?! 買わないと!」

根拠がよく分からない。

「まあ、リビングに一台あってもいいかもな」

「でしょ、でしょ? じゃあ買っちゃおう!」

異様なテンションで箱を担いで行った藤和を見送りながら、その
空気清浄器のパンフを見てみると…

『お肌うるおい、美白効果!』

肌はうるおいかもしれんが、美白効果はどうだろうか。

で、買うものは買ったので後は電車で帰るだけだ。

「おい、それ貸せよ」

よろよると歩く藤和にいう。

「でも、あんたパソコン持ってんじゃない」

「んじゃあ、これでどうだ」

空気清浄器をひよいと持ち上げ、代わりにパソコンを渡す。

「これでいいだろ」

「うん…」

ふと思ったのだが、なんで俺はこんなにも女子と仲良くしてるんだ？

苦手だったはずなのに。

はぁー、もうわかんねえ。

やっぱり自分の気持ちってよく分かんねえ。

人の気持ちもろくに理解できないけどな。

寮の最寄りの駅で降りたとき、藤和が口を開いた。

「立川！」

「お、おう？」

名字で呼ばれたぞ。

「ありがとね」

「そんな…感謝されるようなことはしてない」

照れ隠しに少し足を速める。

寮って、意外といいのかもしれないな。

第四話 『二度目の買い物』 (後書き)

次回もよろしくお願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0804y/>

accidental overlapping ~ 偶然の重なり ~

2011年11月27日18時54分発行